

川の子ども新聞

THE JOMO SHINBUN
上毛新聞

第13号



利根川の水の精「ボトム」

水の里へ、小さな秋の旅。

秋、ちょっと旅気分^{たびきぶん}で、ダムや川へあそびに!
きっと新しい出会いがある。発見もあるよ。



- P2-3 **品木ダム探検隊**
ちょっと変わった品木ダム。ほかのダムとどうちがうの? 次のページを見てね!
- P4-5 **川虫調査による「群馬の川の水質マップ」**
- P6-7 **「多自然型川づくり」ってなあに? トピックス・おたより**
- P8 **ボトムの楽校**

品木ダム水質管理所(草津町)にやってきた子ども記者たち

川にまつわる話 12

板橋 春夫

◆草津の開湯伝説

品木ダムに近い草津温泉は、白根山のふもと、標高1200mの高原に位置します。強酸性の温泉で、硫黄のにおいが強いところから古くは「臭水」と呼ばれ、草津の地名の由来となっています。自噴泉としては全国一の湧出量を誇ります。

温泉の起源については、僧行基や源頼朝の開湯伝説があります。頼朝の場合には浅間山方面へ狩りにやっ



てきて温泉を発見したと伝えられています。温泉のそばに大きな石があり、そこへ頼朝が腰掛けたので「御座の石」といい、温泉を「御座の湯」と呼んでいました。この御座の湯は後の「白旗の湯」です。頼朝の入湯に際し、あたりのアシを刈ったので、この付近では片葉のアシが生えるそうです。また、頼朝の入湯に立ち会った六合村湯本氏の家紋は三日月ですが、それは頼朝が入った湯に三日月が映ったという故事になむと伝えられています。

昔から夏の土用の丑の日に水浴すれば病気になるという俗信がありました。そして草津では、この日に「丑湯祭り」を行います。丑の日の丑の刻(真夜中)に入浴すると、1年間入ったのと同じ効果があるといわれています。

◆冬住みの習わし

草津は冬の間、積雪が多く寒さが厳しい土地柄で、旧暦10月8日(現11月9日)からの半年間、湯治宿の主人らは湯治場を閉鎖し六合村小雨に移動しました。これを「冬住み」といい、旧暦10月8日からの冬住み前に薬師堂へお参りし、翌年の旧暦4月8日(現5月15日)には冬住みの場所から草津へ戻って、まず薬師堂でお参りをしてから営業を始めました。

冬住みの習わしは、明治30(1897)年ごろまで続いていた。冬住み期間中、湯治宿の主人らは譚いや義太夫、俳句に親しむなど優雅な時間を過ごしたといえます。その後、道路が整備され、次第に定住の温泉集落になっていきました。

◆草津の居人と日和祭り

さて、このような冬住みの習わしがあった草津温泉ですが、江戸時代には住民がふもとの六合村小雨へ移動した後、「草津の居人」と呼ばれる人がたった1人で湯治宿に残る習わしになっていました。草津では、春先から夏にかけて雨が続きと入浴客が少なくなるので、雨の多い時期には「日和祭り」といって晴れ祭りを行いました。このときは草津の居人が修験者と呼ばれる宗教者を頼み、村人が各家から1人ずつ出て、薬師堂で修験者とともに雨が止むことを祈りました。草津の居人は天候を判断しながら日和祭りを行う責任者でもありました。

□参考文献/萩原進「草津温泉史」(国書刊行会、1980年(初版1948年)、都丸十九「編者」上野の伝説「第一法則、1997年、萩原進ほか「上州の温泉」(みやま文庫、1996年)、宮田登「日和見」(平凡社、1992年)

板橋春夫(いたばし・はるお) 1954年生まれ。群馬歴史民俗研究会代表。著書に「平成くらし歳時記」(岩田書院、2004年)、論文に「火の番奉行にみる生活変化過程の一面」(日本民俗学)243号、2005年)などがある。